

## グローバリゼーションの時代における映像研究

### ——国際ミニカンファレンス「ワールド・シネマの新地平」

梶川 瑛里

映画館では、耳慣れない国の映画が上映される。テレビで流れるニュースは、遠い土地の出来事を見せる。PCやスマートフォンを眺めれば、そこでは国籍さえもあやふやな——しかし、自分の生活する場所とは違うところで生まれたように見える——動画が、スクリーンを流れては消えていく。今、映像は世界のそこかしこに浸透し、これまでは決して出会えなかったであろう映像(そして、そこに映るもの)と出会うことができるようになった。

2018年11月10日から11日にかけて開催された「ワールド・シネマの新地平」は、このような状況に回答するようなものだった。名古屋大学、ウォリック大学、日本映像学会中部支部の共催により、名古屋大学で開催されたこの国際ミニカンファレンスでは、国内外の複数の地域から研究者が集まり、映像のグローバルな状況を批判的に捉えながら、現代における映像研究の課題に多角的な方向から取り組んだ。本ミニカンファレンスに関する情報を記したウェブサイト<sup>1)</sup>によれば、その目的は「今日ますます加速度的に進行するグローバル、トランスナショナル、ディアスポラな文化に関する理論や言説を因果論的にまとめるような包括概念として」用いられてきた「ワールド・シネマ」という用語を、「よりダイナミックなものとして捉え、研究者たちがそれぞれの特定の言語、地理、歴史をばらばらに研究している現状を媒介する概念として考えていくことを提案」するというものである。同時に、「『ワールド・シネマ』という概念から」参加者が自らの研究や関心を捉え直すと同時に、「異なる地域間の対話」によって、「映像研究・映像文化で鍵となるさまざまな概念についてクリティカルな地平を広げるような新しい問いが生まれていく」ことが期待されている。

本ミニカンファレンスの第一の特色は、多様で「ばらばら」なテーマを扱っていることだと言えるが、これは近年、ますます顕著になっている映像をめぐる環境の変容と深く関係しているとも見える。グローバリゼーションや技術革新によって映像のウェブが世界を結びつけて

いく中で、異なる地理的文脈において育まれた映像文化の関係を考慮することの重要性は増している。それを考えるためには、従来まで映像研究の中心を占めてきた「映画」のみならず、異なった形態をとる映像メディアを含めることで、複数の映像メディア間でなされる交渉に目を向けなければならない。さらに、映像「作品」を中心的な対象とするのではなく、むしろ「作品」を取り巻くプロセスに焦点を当てることで、ひとつの国には集約されない映像をめぐる複雑な環境を明らかにすることも必要とされる。

以下では、ミニカンファレンスを通して見られた2つの傾向、すなわち非主流的な映像に焦点を当てようとする傾向と、映像作品を取り巻くプロセスを解明しようとする傾向に着目しながら、資料をもとにそれぞれの発表内容をまとめていく。

#### セッション1:「名古屋——ウォリック・トーク」

名古屋大学、ウォリック大学双方の研究者が自らの研究テーマについて発表する最初のセッションでは、エコロジーや帝国主義といった映像研究の分野においても繰り返され論じられてきた2つの問題に新たな視点を持ち込むべく、既存の枠組みを更新することが試みられた。研究対象は大きく異なるが、両者が目を向けるよう促すのは、今まであまり議論されてこなかった映像である。

ウォリック大学のカール・スクーノヴァー氏「砕かれた世界——シンクホール、GIF、映画のエコロジー」では、シンクホールを中心的な概念として、GIFや20世紀に制作された映画に見られる「環境と交渉する複雑な表象モード」(スクーノヴァー)の再考が提唱された。人間の知覚では捉えきれないようなカタストロフを表象する際、21世紀のCGI映画は人間にとって把握が容易な直線的構造を用いてしまう。しかしその一方、GIFや*Crack in the World* (1965、アメリカ)などといったデジタル以前の映画は、

シンクホールのように反復的な構造によって慣習的な映像メディアを問題化し、エコロジーの言説に新たな視点を与えてくれるというのだ。名古屋大学の小川翔太氏「空間的スケールの情動——帝国日本における小型映画と観光」で焦点が当てられたのは、アマチュアの手によって作られたトラベローグ・フィルムの可能性である。スケールという概念を導入することによって、小川氏は、アマチュア制作のトラベローグ・フィルムが帝国主義観光を複合的な観点から見ることを可能にすると主張する。旅行中に撮影をしている時間だけでなくフッターの収集などといった映画制作者の日常的な時間も可視化するそれらの映画は、我々に日常と、帝国主義や資本主義の間のコミュニケーションを認識させるものだったという。

両者の発表は、異質なもの同士の思い掛けない接触の抽出とそれによる新たな視点の発見に基づいていた。スクーンヴァー氏によって描かれたシンクホール、GIF、アナログ的映画の結びつきは、エコロジー的言説はもちろんのこと、従来考えられてきた映像の存在論に疑問を投げかけるものとなるだろう。小川氏は、アマチュアの手で作られた小型映画を介入させることで、ほぼ不可能であるかのように見える小さなものと大きなものとの間の交渉の可能性を開いた。

## セッション2:「大学院生ワークショップ」

2番目のセッションでは、ウォリック大学、筑波大学、名古屋大学の大学院生がそれぞれの研究的立場やそこで用いている理論や方法論を発表し、相互に意見を交換し合った。それぞれのテーマは、中国の映画およびテレビ、戦時下日本の影絵アニメーション、移民・難民を主題とする映画、マレーシアのサイノフォン映画と多岐にわたるが、4人の発表者の間ではひとつの意識が共有されていた。



それは、国家と向き合う際に異質なもの同士の関係を軸として問題を考えなければならないということである。例えば、ジェイミー・ツァオ氏「方法としてのグローバル・クィア・メディア——中国映画テレビ研究におけるクィア的転回」は、中国のテレビとそのスターの事例を通して、国際的な文化と地域的な文化の交流の場として現れ得るグローバル・クィア・メディアの方法論的可能性を主張した。筆者である梶川瑛里「狭間を想像する——日本アニメーションの歴史的考察」は、『マレー沖海戦』(1943、日本)という戦時下日本のプロパガンダ・アニメーションがコスモポリタニズムとナショナリズム、近代と前近代、実写とアニメーションの矛盾や葛藤を指し示すものだと指摘した。伊藤由果氏「境界はどこか?——スクリーンにおける境界の変容」でも、「移民」や「難民」を扱い、移動を主題とした『海と大陸』(2011、イタリア・フランス)などの映画作品は、境界線を可視化し国民国家を揺るがすという点で意義を持っているということが示された。そして周蔚延氏「マレーシアのサイノフォン映画の再考」は、*Absent without Leave* (2016、台湾・マレーシア)というインディペンデント映画を通して、ディアスポラが未だに有効であることを示しながら、国境を越えて活動する映画監督とその作品を評価する理論と方法を模索した。

国家的領域を問題化することは、同時に国家を超えるより大きなネットワークを可視化することでもある。それを可能にするためには、映像メディアの世界的ネットワークに関する諸要素の実態を把握しなければならない。研究発表が終わった後に設けられた議論の場では、研究対象であるテレビや映画作品を取り巻く生産、流通、消費を多面的に捉え、その複雑な関係性をどのようにして研究するのかということが課題として残された。

## セッション3:「映像学会中部支部研究発表」

日本映像学会中部支部の研究発表会を兼ねたセッション3では、2人の研究者による発表が行われた。セッション1と2に通底するビジョンを持つこれらのセッションで強調もしくは示唆されたのは、映像をめぐる環境が複雑化していく中で、映像それ自体の捉え方を刷新する必要があるということだ。

馬定延氏「ビヨンド・シネマ——現代美術におけるスクリーン・プラクティス」は、シネマを「映画館、そして映像と接する3次元空間をめぐる規範と制度全般、さらには理論

研究の地平までのことを指し示す」(馬)ものとして定義した上で、映画のみに限定されない多様なスクリーンの在り方に関するいくつかの言説を引用しながら、スクリーンの概念を更新する必要があると主張するものだった。また、その射程はウェブ空間にまで及ぶという。馬氏によれば、インターネットを通じたスクリーン体験が既存の文脈において認識されている映像やその流通、消費、価値付けに対して問題を提起していることも考慮する必要があるという。一方、洞ヶ瀬真人氏「テレビ時代のメディア環境と水俣病ドキュメンタリーの映像表現——熊本放送初期作品を中心に」は、『111—奇病15年目の今』や『0.00α—第三水俣病—』といった熊本放送制作の水俣病に関するドキュメンタリーの映像分析を通して、ともすれば加害側に配慮した日和見報道だと批判されかねない曖昧な報道を、水俣病の背後にある複雑さを浮き彫りにするようなものとして見なすことができるという見解を示すものだった。このような複雑化した表現は、「個々の制作者の創意よりも、その作家たちが身を置いた水俣の社会環境に触発されること」(洞ヶ瀬)によって生まれたものであり、そこでは人間的主体が解体されているのだという。

映像の領域が拡大し、映像と社会の接合点がますます複数化、肥大化していく中で、両者の発表は強いアクチュアリティを持っている。馬氏のスクリーン概念の更新は、スクリーンが遍在するようになった現代では避けられないものである。洞ヶ瀬氏によって明らかにされたテレビ・ドキュメンタリーの在り方は、テレビが他の複数のメディアとの相関関係において成立している現状のより深い洞察へと繋がるだろう。

#### セッション4:「基調講演」

セッション4は、トマス・エルセサー氏による基調講演である。「トランスナショナル・シネマ、またはワールド・シネマ——映画制作者はどうして二人の主人に仕えることになるのか」と題されたその講演では、それまでの各研究発表を通して多面的に、かつ断片的に提起されてきた映像研究をめぐる問題系が、明瞭かつ鮮やかな口跡によって展開されるとともに、現代における映画の可能性に賭けることが示された。

エルセサー氏の論の中心にあるのは、グローバリゼーションであり、それはヨーロッパ映画の凋落や「ワールド・シネマ」の台頭を生じさせ、映画にポジティブな影響と

ネガティブな影響の双方を与えたと指摘された。その両義的状况を顕著に示す例として挙げられたのは、デジタル化や映画祭の存在である。デジタル化は、生産コストの低下によって映画制作へのハードルを下げたが、高価なCGI技術を贅沢に用いたハリウッド映画への観客の一極集中を起こした。一方、映画祭は、ハリウッドと異なる覇権を築き、非ハリウッド的な映画製作のあらゆる側面に干渉し影響を及ぼすような力を持つようになったが、そこでは、映画作家が両義的な立場に置かれている。映画祭はあらゆる国の映画監督に機会を与える一方で、それらの映画作品を「映画祭映画」といった共通性によって定義しているのだ。このような状況の下で、映画監督たちはその国籍を瞬時に判別できるナショナルな特徴を装うことが求められる一方、国際的に通用する批評的意識を代表すべきだとも要請されているという。

エルセサー氏は、グローバリゼーションの時代における映画が異質なものを同時に抱えていることに注意を促す。エルセサー氏によれば、グローバリゼーションは新たな仕方、昔よりも強固に中心的で巨大な存在を生み出したと言えるかもしれないが、そこには、周縁化された小さきものが秩序を転覆させる可能性も潜んでいるという。現代における映画の可能性は両義性から生まれるということを念頭に置いて、映像研究に向き合う必要性を強く感じた。

#### むすびにかえて

本ミニカンファランスを通して見えてきた映像とその研究の可能性は、映像が二重の意味で生きているということに由来している。第1に、とりわけ若い世代の間で動画による個人表現とその共有が日常的なものとなりつつある現代的環境にあって、あらゆる場所で日々有象無象の映像表現が生まれているという意味である。それぞれの研究発表が問題とする対象(GIFやアマチュア映画、テレビなど)やその目的(既存の枠組みの再考や複雑な関係性の解明、映像概念の更新)にそれが強く反映されると言えるだろう。第2に、映像は、スクリーンが存在していれば常に上映され、それを視聴する者を触発することができるという意味である。この第2の意味は、ミニカンファランスの2日目で特に強く作用していたものだ。

2日目に行われたのは、エルセサー氏が監督したドキュメンタリー『サン・アイランド』(2017、ドイツ)の上映会で

ある。監督本人の前口上とともに上映されたそのドキュメンタリーには、物語的にも、または表現的にも、いくつかの諸要素が絡み合っている様が見られた。個人と社会、家族、戦争などが交錯する物語と、数多あるフッテージの中から取捨選択されて編集された映像とエルセサー氏によるナレーションによって織り成されるその作品は、1日目に交わされた議論を想起させるものだった。上映後のQ&Aも極めて興味深いものだった。エルセサー氏に対して大学院生と研究生が質問する様子は、映像によって触発されたことで新たな対話が生まれるダイナミズムを感じさせた。

映像を感じて、考えること。映像研究における発表で映像の上映が当然であるかのように組み込まれる現状は、動画を動画として受け取る動的なリテラシーが求められていることを示唆する。映像を介してグローバリゼーションを思考することは、あらゆるものが流動的に移動する時代の中で、相互的な接触により以前とは異なった局面が生まれる瞬間を見極めることに繋がるだろう。「ワールド・シネマの新地平」は、様々な形の出会いが生じた場であった。このような場がさらに広がり、研究者同士の対話が進むことで、また新たな可能性が芽生えるのではないだろうか。

1 | <https://eizogaku.wordpress.com/events/>  
最終アクセス 2019年3月1日

Nagoya-Warwick International Mini-Conference

## New Horizons in World Cinema

### ワールド・シネマの新地平

**Nov. 10 (sat)**

10時00分-12時 | **Hideoaki Fujiki (Host/Translator)** | **Karl Schoonhoven (Faculty of Warwick)**  
 講師 | 日本代表 | 会場 | 大講堂 | 会場 | カンパニオン・センター | 会場 | 大講堂  
 12時00分-12時

**13時00分-14時 | 特別講演 | 映画とメディアの未来**  
**Karl Schoonhoven (Guest of Warwick)** | **The World Cracked: Siblings, GIFs, and Cinematic Ecologies**  
 カール・シューホフワー (コロンビア大学) | 世界は割れた: シンガポール、GIF、映画の生態学  
**Shinji Uemura (Nagoya University)** | **Effect of Scale: Studio Ghibli Films and Tourism in Imperial Japan**  
 小泉新二 (名古屋大学) | 空間的スケールの効果: 戦時体制下のスタジオジブリ映画と観光  
 14時00分-15時

**15時00分-16時 | 特別講演 | 中国のメディアと文化**  
**Jianjun Zhu (Guest of Warwick)** | **Global Quest Media as Method: Making a Queer Turn in Chinese Film and TV Studies**  
 ジェーン・ジュン (コロンビア大学) | 方法としてのグローバルクエストメディア: 中国映画とテレビ研究のクィア転回  
**Yuki Kishimoto (Nagoya University)** | **Imagining In-Betweenness: A Historical View of Japanese Animation**  
 岸本由紀 (名古屋大学) | 想像と中間性: 戦時体制下の日本アニメーション史論  
**Yuka Nishida (Nagoya University)** | **Whose is the Budget? Transformation of Framework on the Screen**  
 西田由香 (名古屋大学) | 予算は誰のもの? スクリーン上の枠組みの変容  
**Hui Tan Chee (Nagoya University)** | **Re-thinking Singapore Malaysian Films: A Case Study on Independent Film "Absent Without Leave"**  
 陳慧珊 (名古屋大学) | マレーシア独立映画の再考

**16時00分-17時 | 特別講演 | 映画とメディアの未来**  
**Shigejiro Masuda (Guest of Warwick)** | **Medium of Masses: Media and the Screen** | 講師 | 前田英二 | 会場 | 大講堂  
**Jung-Yeon Min (Nagoya University)** | **Beyond Cinema: Screen Theory in Contemporary Art**  
 金貞妍 (名古屋大学) | シネマを超えて: 現代美術におけるスクリーン理論  
**Masato Ogino (Nagoya University)** | **Minority Documentaries with the Television Media Ecology: An Historic Arrangement of Local TV Documentaries** | **Audio-Visual Expression**  
 小園真太 (名古屋大学) | テレビ時代のマイノリティドキュメンタリー: 放送媒体の歴史的整理と音視覚表現  
 17時00分-18時

**18時00分-19時 | 特別講演 | 映画とメディアの未来**  
**Thomas Elsaesser (Guest of Warwick)** | **Transnational Cinema or World Cinema: Why Filmmakers Find Themselves Serving Two Masters**  
 トム・エルゼッサー (コロンビア大学) | トランスナショナルシネマとワールドシネマ: 映画制作者の二重侍  
 19時00分-20時

**Nov. 11 (sun)**

9時00分-12時  
**Sonny of The Sun Island (2017)** | **by: Thomas Elsaesser**  
 映画『サン・アイランド』(2017) | 監督 | トム・エルゼッサー  
**Q&A with the director / 監督との質疑応答**  
**Reinhold Hanisch (Nagoya University)** | 講師 | 菅原伸太郎  
 12時00分-13時  
**Thomas Elsaesser (2018)** | 名古屋大学 | トム・エルゼッサーの特別講演  
 特別講演 | トム・エルゼッサーの特別講演の中で、キルヒンガウスの映画研究センター、名古屋大学、そのほかの機関で映画研究の歴史を振り返る。特別講演の録音はYouTubeで公開されています。  
**Karl Schoonhoven (Warwick)** | シュンホフワー (コロンビア大学) | 特別講演  
 特別講演 | シュンホフワー (コロンビア大学)の特別講演の中で、名古屋大学、カンパニオン・センター、コロンビア大学を訪問。  
**2018.11.10 (sat), 11 (sun)** | (本報特別付録) | 名古屋大学文化研究センター | 名古屋大学文化研究センター | 名古屋大学文化研究センター  
**Conference Hall, Intercol Research Bldg, for Humanities & Social Sciences, Nagoya University**  
**Simultaneous Interpretation / 同時通訳 (English-Japanese)**  
 Organized by Cinema Studies Unit, Graduate School of Humanities, Nagoya University  
 Department of Film and Television Studies, University of Warwick  
 Osaka Branch of the Japan Society of Image and Sciences  
 Supported by Center for Transnational Culture and Society, Graduate School of Humanities, Nagoya University  
 Contact | Hideoaki Fujiki (email: [hideoaki.fujiki@nagoya-u.ac.jp](mailto:hideoaki.fujiki@nagoya-u.ac.jp))  
 Website | <https://eizogaku.wordpress.com/events/> | Campus Map (B4-6) | <http://www.nagoya-u.ac.jp/mpe/index.html>